

留学報告書

2023年2月

立石 泰佳 (たていし やすか)

PhD 課程も 2 年目に突入し、半年が過ぎようとしています。相変わらず遅筆で恥ずかしい限りですが、昨年 7 月以降の留学生活について報告させていただきます。

MRes Dissertation

UCL の経済学部では PhD の 1 年目に Master of Research (MRes) という名前の修士号が付与されます。この便宜上の学位取得が 2 年目への進級のために必要なのですが、その要件の 1 つとして論文を書かなければいけません。アメリカの経済学 PhD では 2nd year paper が課されるプログラムも聞いたことがあります、1 年目に書かなければいけないのは珍しいと思います。よく PhD のコースワークを終えたばかりの学生に対して先生方が “from a consumer to a producer of research” になるよう説くことがありますが、UCL ではその移行が早いうちに求められるという印象です。もちろん早い段階から研究に取り組むことができるというメリットはありますが、1 年目の厳しい授業の後にもう少し休みたかったというのも正直なところ。そんなわけで夏休みは主に論文執筆に励んでいました。

私の書いた論文は “When Refugees Become Natives: Intergenerational Assimilation of Palestinian Refugees in Jordan and the Role of Nationality” というタイトルで、ヨルダンのパレスチナ難民について分析しました。1969 年にヨルダンに逃れたパレスチナ難民のうち、当時エジプト領であったガザ地区出身の難民はヨルダン国籍を付与されず、ヨルダン領であった西岸地区出身の場合は国籍を得ることができました。ヨルダンは国籍取得が父系の血統主義なので、たとえばヨルダン生まれであっても父親がガザ地区出身であれば子供も国籍を得られないという状況になっています。論文の第一部では Propensity Score Matching という手法を用いて、全てヨルダン生まれのサンプルのうち、(1) 父親がヨルダン生まれのヨルダン国籍、(2) 父親が西岸出身のヨルダン国籍、(3) 父親がガザ地区出身のパレスチナ国籍、の 3 つのグループを比較し、(2)のグループは教育・就業率・賃金・社会保障へのアクセスなどで比較的 (1)に近づいているものの、(3)のグループは非常に劣っていることを示しました。また、第二部では 2011 年以降のシリア難民危機の影響を分析しました。ヨルダンはシリア難民の主な受け入れ国の 1 つですが、シリア難民の大多数はヨルダン国籍を持っていないため、(3)のグループと非正規の労働市場での競合が予想されます。この仮説を検証するために shift-share IV という手法を用いて、シリア難民流入の影響が大きい地域ほど(3)のグループの失業率が上がったものの、(1)と(2)には有意な影響がなかった、という分析結果を得ました。

データの欠陥に翻弄されながら分析を進めたので説得力のある論文になったのかは分かりませんが、世代を超えた難民の調査や、国籍に着目した既存研究は非常に少ないので分野へ

の貢献をはっきりと書くことができました。また、自分が真に面白いと思えるテーマに向き合えて、締め切りまでの時間に苦しみながらも知的に楽しい時間を過ごすことができました。12月に成績が発表され、無事に **Distinction** の評価を得られたのでほっとしています。加えて1年目のコースワークと併せた全体評価でも **Distinction** を獲得することができました。経済学部出身ではないために長らく能力不足と劣等感に悩んできたので、感慨深かったです。

フィールド科目

PhDの2年目は自分の専門に近い科目の授業（通称フィールド科目）を履修することになります。ところがUCLはカリキュラム再編前の名残りか、先生たちが調整しないからか、2学期目にほとんどの授業が集中してしまいました。そもそも授業への出席も必須ではなく、試験などありません。1学期目に特に取りたい授業がなかったので、LSEで開発経済の授業を取っていました。UCLの開発経済学の授業は途上国の企業活動について学ぶのに対し、LSEでは主に家計を対象とした研究について学ぶので、対比できるのが面白いです。今まで自分が触れてきた実証経済の論文だけではなく、理論寄りの研究についても学ぶことができました。今学期はUCLで開発経済、国際経済、労働経済（構造推定）の授業も受講しています。

ウガンダ・ルワンダの研究

昨年夏ごろから Northwestern 大の松浦さんに声をかけていただき、ウガンダ・ルワンダの研究を進めています。この二か国は Value Added Tax (VAT) のデータがあり、企業の国内取引や貿易について知ることができるのが大きな魅力です。ただ、このデータを得るには現地政府から承認を得ることが必要なので、実際に政府の人と会った方が良いと言われてたり、政府側の人事の影響で申請が滞ったりして、データ取得のためだけにかかなりの労力を費やしています。9月には International Growth Centre (IGC) という機関の travel grant を貰ってウガンダに渡航し、ネットワーキングイベントに参加しました。その後、ルワンダにも似たようなデータがあることが分かったので申請しようとしたのですが、やはり最初のステップは現地で政府の人に会うことだと言われました。そのため渡航費用のための研究資金にいくつか申請し、IGC から Small Research Grant を貰えることになりました。研究資金を獲得したこと自体が初めてで、少額とは言え選ばれたことが嬉しかったです（主に松浦さんのおかげです）。また、プロポーザルを練り直している頃に私の UCL の同級生が同じデータを使おうとしていることが分かり、1月からは3人でプロジェクトを進めています。3月には今度は3人でウガンダ・ルワンダに渡航することになったのでデータ申請に進展がありそうですし、単純に現地にいけることが楽しみです。今は渡航準備と、新たな研究資金の獲得のために奔走しています。

その他

最近では2人目の指導教官から声をかけていただいて、日本企業の FDI について研究する共同プロジェクトにも参加しています。また、ヨルダンの研究をしたことを契機にアラビア語

の授業も受講しており、元々語学が好きだったので気分転換になり楽しいです。とても忙しくなりましたが、PhD の学生でテニスサークルを作ったまに打ち、趣味のランニングを細々と続け、週末の作り置きと毎日のお弁当作りも欠かさずにやっていて、充実した日々を送っています。

おわりに

11月に父が他界し、2カ月ほど日本に帰国していました。5年前に倒れて以来死に目にも会えないことは覚悟していましたが、少し前までは入国制限のために状態が急変しても葬儀にも出られない可能性があるという状況だったため、帰国して別れの時を過ごすことができ安堵しました。奨学金のおかげでTAの業務もなく、学期中に日本にいても差し支えなかったのも大きな安心材料でした。今回大学の先生方やロンドン／日本の友人に励ましてもらい、研究やRAの仕事に関しても締め切りが迫る中で私の不在の穴を埋めてもらい、非常に恵まれた環境にいることを実感しました。私が海外で好きなことに打ち込んでいるのは家族や友人がバックアップしてくれるからであり、それは私の努力以上の要因だと感じています。この場を借りて、重ねて御礼申し上げます。